

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回二日発行)
平成十六年五月一日発行(第百七卷第五号)

ホトトギス

五月号



旬日記 汀子

平成十五年五月一日 下朝句会

散りしもの掃き庭の春惜みけり
色ほどくと香をほどく牡丹かな
五月三日 野分会、夏行

霞脱ぎゆひける立山見えて着く
条件の揃ひて待てる昼気楼
第二句会

海暮れてなほも海市に執しけり
消えてゆく残雪も又旅名残り
背景は立山と花林橋かな
春宵の言葉集めて旅仲間

五月四日 野分会 三回目
朝市に誘はれてあし朝寝かな
朝寝して旅の至福を人知れず
残雪の山巒折りし日の出かな

五月五日 菅屋ホトトギス会
立山の岬々と若葉の裾を曳く
子供等と別に子供の口のありし
五月八日 清交社

新緑の明るさ消して雨の朝
雷鳴に覚め雨音に寝落ちたる
降りつる雨も五月の空のもの
これよりは旅多き日々五月かな

移りゆく五月の雲の早さかな
新緑を来し目に岬々と嶺現るる
片づける心づもりの更衣
一雨に新緑深めたる狭庭

捨てることにも上手下手更衣
五月九日 工業倶楽部
旅疲れいつか消えぬし葉の日
健康といへぬ寝不足薬の日

松風の音ありそめし風炉手前
五月十日 四国ホトトギス同人会
ていれぎに水の涼しさ流れをり

葉桜に桜三里といふ名所
カーブ又カーブ藤又藤懸り
なほ奥に人の暮せる植田あり
水音といふ涼しさに風渡り

立てばすぐ汗引く山の深さかな
溪谷といふ水音と万緑と
五月十一日 四国ホトトギス俳句大会

明易や雨に閉ざされぬし窓も
皆濡れて集ふ五月の雨押し
邂逅の言葉短く涼しけれ
睡眠を良薬として葉の日

健康の過信いまして葉の日
み吉野の草の名覚え葉の日
五月十三日 大阪倶楽部
日を散らす風の若葉となりけり

峡深く来し溪音と若葉冷
火色なほ暮れぬ空あり薪能
立山の見えて来る距離夏霞
五月十三日 綿業倶楽部

牡丹の雨とは容赦なかりけり
更衣ともかく旅の荷を揃へり
好きな色一つ増えたる更衣
雨降つて止んで薄暑の旅路あり

五月十六日 北近畿ホトトギス俳句大会前日句会
カーブ又カーブ万緑展け海
アカシヤの花も旅路も尽きる頃
五月十八日 北近畿ホトトギス俳句大会

軍艦も遊船も波つゞきかな
どの島の花船の香となく航きぬ
五月二十日 有恒倶楽部
鳥賊火いま水平線に並びをり

薔薇赤し思ひ出たよふ波止タベ
親展の手紙を薔薇にそへられま
夏めくや玻璃の汚れの気になりて
麦の秋橋がつかぬぎて麦の秋

夜の静寂より戻り来て薔薇の卓
少しづつ仕事残りて夏めきぬ
五月二十日 無名会
目印の見えて左折や麦の秋

雨に色沈めて麦の秋つづく
松落葉昔はこころ浜辺なる
峠抜け来て麦の秋の町に入る
松落葉浜辺のなごりありし庭

海峽を渡る吊橋麦の秋
二日目は雨になる帰路麦の秋
五月二十一日 春菜会
老鶯の声面影に加へけり

風若葉よりほぐれゆく緑かな
圓通寺二万坪てふ竹の秋
虚子曾遊せし圓通寺柿若葉
五月二十二日 きさらぎ会

考へのまとまらぬ日よ芥子の花
芥子赤し又この頃に旅をして
インタビュ受けて薄暑の家路かな
滞在の二日の炊事芥子の花

又すぐに出掛ける午後の薄暑かな
五月二十五日 祝「笠寺」四五〇号
育ちゆく俳誌を祝ぎて揚雲雀
五月二十八日 夏潮句会

身幅出し形見のセルを着ることに
マロニエの若木育てん庭の夏
又一樹庭の若葉に加はさりぬ
薫風の庭にんじん木も見逃さず

五月三十日 時雨会
祝ぎ心少し筍飯炊いて
目の前の眼鏡探してさくらんぼ
五月三十一日 句会と講演の会

梅雨近き雨傘のすぐ役に立つ
水虫に父の生涯ありにけり
茄子植系し夕べの雨を聞く宿り
健康な歩幅水虫寄せつけず

五月三十一日 句会と講演の会
梅雨近き雨傘のすぐ役に立つ
水虫に父の生涯ありにけり
茄子植系し夕べの雨を聞く宿り

健康な歩幅水虫寄せつけず

師走

稲畑汀子

予約が取れてほっとした。

「免許証と案内の葉書を提出して下さい」

カウンターの中の女性はテキパキと処理している。

「奥のテレビの前で座ってお待ち下さい」

「よろしく」

暖かい師走が始まった。ともかく今年の内に仕上げなければならないことが多すぎるのであるが、そこへ次々新しい事が持ち上がって来る。ただただ仕事に追われて師走の実感がないまま毎日過ぎて行つた。

誕生日が来ると四十一年目の運転免許更新をしなければならぬ。

「七十歳を過ぎるとただ免許を更新するだけじゃだめなのを知ってる？」

「え？」

何時の間にかそんな歳になつたのである。でも、まだ運転をするつもりである私は詳細を訊ね、何となくいつも心のどこかに気にかかることとして残つていた。

ある朝、郵便に混じつて捲ると中が読めるべらべらな葉書が届いた。見ると誕生日を挟んだ二月の間に高齢者運転適正検査を受けるようにという案内である。眼鏡を掛けて細かい字を読み取つた。我が家に一番近い西宮へ電話を掛けてみた。

「今からだと十二月八日の一時から四時半までが一人だけ空いていますが如何でしょうか？」

私のスケジュールで空いている日と合う日も八日であつた。

「是非よろしく」

すでに四五人の人達が座っているが、随分年寄りに見えた。時間があるので持つて来た仕事を出して見るが何となく落ちつかない。また仕事のをしまつて深く座り直した。

ここは運転免許を取るための自動車学校である。我々一劃を除くと若い人達が実習するために練習場へ出たり入ったり目まぐるしい動きがある。

「高齢者の適正研修に来られた方、大変お待たせ致しました。こちらへどうぞ」

立ち上がるのは私が一番早い。高齢者と呼ばれたことに些か抵抗を感じながらさっさと歩き出した。

「毎日運転しておられるのですね」

「そうです。四十一年間殆ど毎日」

「すごいな」

「でも、このS字の道は脱輪しそうな道ですね。こんな道は何時もは通りませんよ」

「そつでしよう。ここは教習所ですから。ははは」

運転実習はすぐに終つた。右折、左折の指示器を出し忘れたとくやみながら戻つて来る人もいた。

再び一同部屋に集まつてビデオを見せられる。次はゲーム機に

アクセルとハンドルが付いたような機械の前に座らせられる。二つの黄色い点が障害物を避けるようにしてハンドルを操作するというものである。左右形のちがう四角い障害物をとても避けられることは至難の技であるがしなければならぬ。信号の赤、黄、青を踏み変えるのはまあまあである。動いてる光の点が近づいてきて上下左右の隙間が見えたらボタンを押すというのがあった。何となく右にありそうに見えたので押したら正解で、次からもっと見えるまで待つてスイッチを押したら係の人が驚いている。「最初は1・0といういい点が出てるのに、二度目は0・2ですよ。おかしいなあ」

「二つもおかしくありませんよ。だつて、より正確に見えるまで待つてスイッチを押したのデスもの」

「へえー！」

無事に高齢者検定検査終了書を頂いた。

あとは運転免許証の更新に行けばいい。師走の時間が又少し減ってしまったが、気持ちだけは少し軽くなっているのに気がついたのである。

廣太郎句帳

廣太郎

東京都祭に動き初めにけり 五月二十五日 「田鶴」四百号記念祝賀会

蝸牛角出す早さありにけり 飛魚となりて目指せよ五百号

彼女早や祭の中に消えにけり 五月二十七日 若水会

五月十五日 登高会

地車の屋根が躍つてをりにけり

蚕豆や君の顔にはあらざりし 青空を目指し葵の咲き上る

新茶淹れ古女房でありにけり 日本海鳥賊火へ帳降りてくる

桐の花千年杉に紛れざる 皓々と鳥賊釣舟の沖となる

五月十七、十八日 北近畿ホトギス俳句大会

五月二十九日 三番町句会

大川の水ゆらゆらと夏近し 景涼し三〇一・二メートル 河鹿鳴く水惑星といふ大地

春惜む心は後の宴まで 高橋に川風集め花は葉に 朝風を船滑りゆくすべりゆく 万緑や虚子句碑生れし深大寺

春の宵阪神勝つた又勝つた 五月二十日 草木瓜会 麦秋の風太陽に及びけり

暮の春少し危き人も居て 余花を置く西行庵の静寂かな 来れば直ぐビールといふも習ひかな

つゝ咲く大川端の色として 祭髪結うて江戸つ子四代目 五月三十日 時雨会

メーデーや蕉翁像は何思ふ 迷ひたる中一本の余花に会ふ 門入れば筍飯と判る距離

五月八日 土筆会

咲き満ちて余花となりたる北紀行 古里を恋うて泰山木咲けり

雨後といふ極楽浄土蝸牛 男坂登れば余花といふ至福 筍の余れば飯に炊く女

雑詠 汀子選

佐比売野の秋風となり給ひけり 福山 竹下陶子
 邯鄲の金鈴絹を引きにけり 同
 ふるさとを去る金風の三瓶あり 同
 冬帝の恵みと思ふ日を歩く 鳥取 岡田順子
 その記憶ひもどくことも冬桜 同
 虎落笛また誰かたち海を見る 同
 半焼と言ふも全部と同じこと 東京 河野美奇
 かき抱き共に泣きたる火事見舞 同
 草枯るるとも百様の命かな 同
 秋惜む古都に都心に陸奥に 同 稲畑廣太郎
 初霜に土のぬくもりありにけり 同
 大空を乱して鷹の舞ひ降りぬ 同
 ありありと俎板の上寒の鯉 同 後藤立夫
 焼藪を買ひに矢切の渡し舟 同
 枯蓮となり日月に疎くなる 同
 カフエテラス銀杏落葉の吹き溜り 榎原 稲岡 長
 肩の荷をすり抜け師走問屋街 同
 凧に吹き寄せせられて集ふバー 同

玄関に巢作る燕かくも泥 福岡 松尾緑富
 立秋の明るき話題もて見舞ふ 同
 見舞ふ度瘦せゆくおとと秋立ちぬ 同
 卒寿にはふさはしき名の粥柱 京都 粟津松彩子
 弱法師寝正月してをりにけり 同
 福寿草長子の如き一つあり 同
 初絵馬の猿大名のごときかな 神戸 後藤比奈夫
 雪装は被て櫛は穿かて持つ 同
 冬ざれといふ凜然としたるもの 同
 冬海の平らを翔べる鳶平ら 熱海 嶋田摩耶子
 健康はとり返すもの林檎剥く 同
 待たでよきエスカレーターに乗り師走 同
 はやも師の選に洩れたる初句会 京都 安原 葉
 主病み萩は枯るるにまかせあり 同
 近火とも知らずに眠り呆けし朝 同
 山火事を美しと見て言はずをり 東京 今井千鶴子
 柄の太くぶつきらぼうな時雨傘 同
 寒鯉のゆらりと金の泡を吐く 同
 犬山城ころげ落ちゆく秋日かな 徳島 上崎暮潮
 秋の夜の窓いつばいに城灯る 同
 台風の濟みたる沖に紀州浮く 同
 初もみぢ藻草に及ぶ浮御堂 川崎 関 木瓜
 湖中句碑淋しからずや鴨の浮き 同
 叡山を焼き払はんと冬紅葉 同

雑詠句評（四月号より）

個室とは孤独で自由秋灯 久留米 中村田人

作者は昨年七月に胃の手術を受けられ続いて九月にまた入院手術されたと聞く。最近の病院は殆どが完全看護で家族の付添う事はない。昼は何かと看護婦達の出入りがあるが、夜は静かで秋灯と自分だけの狭い空間があるばかりである。家に在れば机辺の書物、山と積まれた書類、編集の雑務に取巻かれての匆忙の生活から一変、殺風景な個室暮しが始まったのである。はじめは言い様のない孤独感に嘖まれた事であろう。然し考え方によっては個室とは又とない自由な処でもある。全ての仕事から隔離され句境に、瞑想の世界にと心を遊ばせる良いチャンスでもある。病にもあるがままに達観し現況に逆わぬ平常心は矢張り俳人故であろうか、秋灯と云う淋しくも親しみのある季節が今の心情を適切に物語っている。（昭代）

病院の個室であろう。病状が良くなつてくると何となく退屈なような、それでも医者への許可が出なければ退院するわけにいかないのである。見舞客が無い孤独を託ち、しかし大部屋と違って少少の仕事なら個室であるので出来るという自由さはある。灯下親しむ頃の病室での雰囲気が想像される句。（汀子）

杯上げて能登の寒鰯もて祝がむ 石川 辻口静夫

寒鰯はおいしいが、能登の寒鰯は特に脂が乗り、身がしまつておいしい。祝いごとがあり、その寒鰯を食べて杯を上げようというもの。上から下まで、一本に通つた強い調子で押し切つているところ、喜びの気持ちを強く表している。作者の郷土に対する誇りもおのずと感ぜられる。寒鰯の能登を一度は訪れたいもの。（暮潮）

寒鰯の美味しい季節である。日本海の特に能登の沖で捕れた寒鰯は脂が乗つてさぞ美味しいであろう。祝う心持がこの最高の寒鰯をもつて杯を挙げようという作者の気持がこの句に素直に述べられている。能登の寒鰯に寄せる作者の思い入れが読者にも伝わってくる。（汀子）

若水集

廣太郎選

双六・氷柱

博才といふはここにも絵双六 柏 田丸千種
 双六の結果のあとを引いてをり 同
 透明に雪を抜け出す氷柱かな 同
 盲妻の道中双六上りたる 島原 平尾圭太
 振出しに戻れぬ妻の絵双六 同
 傘寿まで一步届かず絵双六 同
 瑠璃色の空溶け込んで軒氷柱 明石 涌羅由美
 先端に光宿して氷柱解け 同
 町の子の視線集めて大氷柱 同
 軒氷柱育つひそかな音に泊つ 神戸 山田弘子
 大氷柱星座しづかに歩みをり 同
 軒氷柱雫のうたふ湯浴かな 同
 にこにこと母は片方に絵双六 東京 藤崎美恵
 氷柱垂れ加賀の山々晴れ渡る 同
 旅宿の氷柱に明けし越泊り 同
 双六を競ふ戦国武将めき 八尾 山下美典
 双六に畳の部屋が適ふもの 同
 駅長が氷柱砕きて初発待つ 同

どつと落ち遠くにも音軒氷柱 鳴戸 岡田耕人
 夜の明けし山家氷柱をまとひたる 同
 男衆夜明けの宿の氷柱難ぐ 同
 絵双六休み取る訳読み休む 多摩 松井秋尚
 出て欲しくない賽ばかり絵双六 同
 てらてらとつらら光つてをりにけり 同
 軒氷柱光の連鎖してゐたり 鳥取 岡田順子
 氷柱折る音の休憩時間かな 同
 浮世てふ流転に遊び絵双六 同
 解け落つる氷柱のリズム速くなる 岡崎 稲垣美枝子
 双六の去年の折目正しけり 同
 双六の正座の尻の落ち付かず 同
 双六に明治の母も乗り出して 石川 松本松魚
 大寺の氷柱落としては子等のもの 同
 鴟尾昏れて大氷柱まだ伸ぶ気配 同
 双六といふじれつたき遊びかな 釧路 三浦いつ子
 このところ理解むつかし絵双六 同
 双六の上りはいつも時間ぎれ 同
 氷柱なる昨日の時間折られけり 八尾 岩垣子鹿
 小屋を発つ合図に氷柱払はるる 同
 お不動の願ひ氷柱となつてをり 同
 軒氷柱炊事当番二等兵 吹田 宮崎 正
 軒氷柱裸電球ぶら下がり 同
 闇の黙月光透ける氷柱かな 同

若水集句評 廣太郎

透明に雪を抜け出す氷柱かな 栞 田丸千種

純白な「雪」の姿を通して「氷柱」の透明感が見事に表現されている。やはり雪国の情景であろう。屋根には雪が覆い被さっており、その合間から氷柱がどんどん伸びて行くに従って一層透明感も増して行くのだろう。この世のものとも思えない程の氷柱の凜とした美しさも見て取れる。

盲妻の道中双六上りたる 島原 平尾圭太

本誌三月号でお知らせ申し上げた通り作者の御令室であられたホトトギス同人平尾みさお様は平成十五年十二月十四日幽明界を異にされた。全盲であられたが終生大俳句作家として活躍されたその裏には、夫君であられる作者の多大なる御助力も大きかっただろう。季題を通して、御令室への愛がひしひしと感じられる。

解け落つる氷柱のリズム速くなる 岡崎 稲垣美枝子

硬く垂れ下がっている「氷柱」も、日が射してくるとだんだん

雫となつて解け出してくる。朝から時間が経過して行くに従ってその雫の落ちる速度の違いを「リズム」という音楽的な表現で文字通りリズムミツクな調べとして景を見事に詠み切っている。

双六といふじれつたき遊びかな 釧路 三浦いつ子

筆者が子供の頃から、「双六」は正月遊びの定番から離れつつあつたような記憶があるが、様々な趣向を凝らしたボードゲームとして今でも健在である。ルールのにも「振り出しへ戻る」「一回休み」等という升目が同じようになり、その「じれつた」さからユニークに季題を表現している。

軒氷柱裸電球ぶら下がりに 吹田 宮崎 正

あまり都会では見られない景であろう。寒い地方の過疎の村であらうか。軒から「氷柱」が垂れ下がり、その奥には「裸電球」がぶら下がっている。不思議と季題を通して何か落ち着いた佇まいを見せている句である。

双六に抜けられずある時間かな 米子 遠藤裕子

正月に大勢が集まってくる「双六」はやはり楽しい。忙しい合間を縫って、ついつい熱中してしまっているのか、はたまた一緒にやっている子供達がなかなか解放してくれないのか。いずれにせよ季題らしい楽しげな雰囲気伝わってくる。